家庭科のとりくみ

―あいぼうの体操服袋をつくる―

附属小学校 教諭 菱田道代

「ぼくのあいぼう、めっちゃかわいいで。」

四月、六年生になったばかりの子どもたちは、あいぼうの一年生より緊張しています。手を引いてゆっくり歩く姿を見ていると、五年前の自分をだぶらせているようにも思われます。

「そんな小さくてかわいい一年生に、なにかプレゼントするものを、家庭科の授業で作っては……」と思い、とりくみはじめたのは、もう三十年も前のことになります。初めはハチマキだったのを、体操服袋に替えて十年ぐらいたちました。

「とてつもないマンネリ」なのですが、継続していると、予想外の意味も見つかります。自分がプレゼントする立場になって初めて五年前のあいぼうのお兄ちゃんお姉ちゃんの気持ちを理解するようになるのです。

「ぼくの袋もこうやって作ってくれたんやなぁ。」

「ぼく、へたやけど、一年生はよろこんでくれるやろか。」

「こんなんで、いいかなぁ。」

「名前だけでなく、模様をつけてもいい？」

と、いつもよりうんと真剣で、たいていは名前だけでなく、喜びそうな目印などを糸でつけています。

中には、こんな子どももいます。

「わたしのもらった袋は、模様も何にも無くてさびしかったので、あいぼうには、ハデなのを作ってあげる。」

と。五年前の評価をここで知ることになり不行き届きを痛感しました。

「ふりまわさはっても、だいじょうぶ。」

家庭科で作るものは、使えるものでなければ意味がありません。一年生のことですからおとなしくさげているとは限りません。ランドセルの横にぶらさげてバスの中で引っぱられて通うのですから、丈夫であることが第一です。また、洗濯機にかかることも考えておかねばなりません。

布を裁断し、しるしをつけ、ミシンで縫うというどの作業も手がぬけません。「口あき」の部分は子どもにとっては、むずかしいところですが、そこが一番破れやすいところだから、しっかりさせたいのです。ともかくはっきりめあてを持てる題材であることは確かです。

技術的なことは、近年苦しくなってきています。袋づくりでは、個別に教えなければならないこともあります。思うようにできなくてギブアップしそうになる子もいて、励まし手助けしたりして、どちらも必死で乗り越えることもあります。針や糸やミシンといったようなものに触れる機会が少ないから、当然といえば当然だと思います。だからこそ、今、なるべく手先を使わせたいという気持ちと、作りあげた喜びを味わわせたいという願いが、私たちに強くあります。

出来あがった袋を照れながら一年生にわたしている姿を見るのは、ほんとうにうれしいものです。

大学の方々に、時々、キャンパス内の落し物として届けていただくオレンジ色の袋がそれです。オレンジ色があせているほど、上の学年の子のものなのです。もう、次の布の用意もできています。

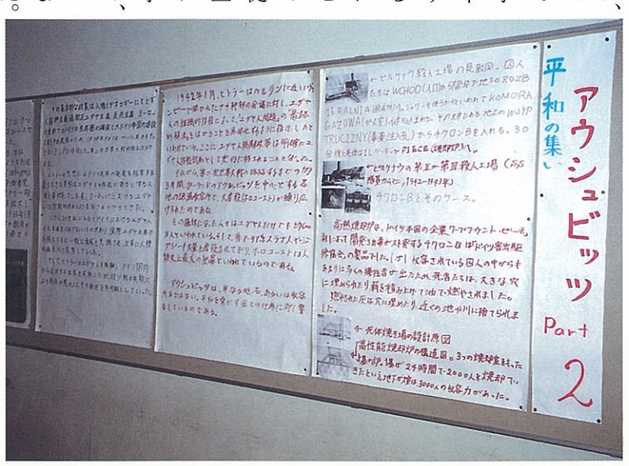
2000年度 平和の集いの取り組みについて

附属中学校 教諭 吉岡睦美

事前学習の取り組み

今年度の平和の集いは二〇〇一年一月二十六日に、「忘れてはいけない20世紀の過ち」をテーマとし、「21世紀を迎える今も、世界各地で民族紛争や戦争は後を絶たず、多くの人々の人権や生命が脅かされている。「アウシュビッツ」を始め、人類史上例のない「ホロコースト」の中から、あらゆる戦争や差別の根源を見出し、あのような悲劇が起こらないよう、平和を心から願い、その実現のために努力することの尊さや人として「いかに生きるべきか」を学びあえる機会としたい」をねらいとして行った。この平和の集いに先駆けて一月十八日に三年生が、一月二十五日に一年生と二年生が、事前学習を行った。

「ホロコースト」については、加害者と被害者という二つの立場に分かれる。事前学習では、その中で被害者であるユダヤ人を助けた人として「杉原千畝」について学習することを通して、平和の実現のために努力することの尊さや、人としていかに生きるべきかについて学ぶことを目標とした。生徒自身の事前の取り組みとしては、生徒会本部役員が杉原千畝生誕百周年記念写真展やアンネのバラの教会を見学したり、図書部がヒトラー、アウシュビッツ、アンネ・フランクについてまとめたものを掲示展示した。

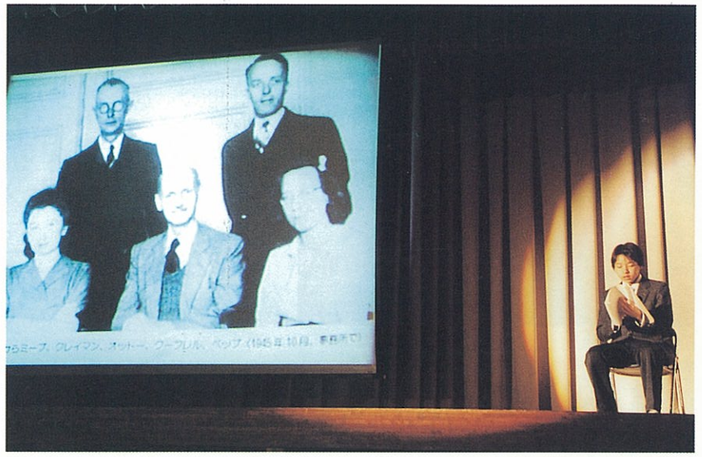


当日の取り組み

一月二十六日は、体育館に全校生徒が集まり、生徒会本部役員と生徒会合同委員会が中心となって進められた。生徒会長の石橋唯さんが、はじめの挨拶の中で、第二次世界大戦中のユダヤ人迫害を通して戦争が持つ残虐さ、恐ろしい破壊性を学び、その中で必死に生き続けた少女アンネの日記から、本当の人間性とは何かを考える機会に、また戦争について、真剣に

考えることができる機会とすることという当日のねらいを述べた。

その後「アンネ　～ユダヤ人迫害の実態～」の発表が始まった。主なあらすじと、話の舞台は、ユダヤ民族撲滅主義を掲げるナチスドイツが動き出した激動の第二次世界大戦期を舞台に、『殺人工場』アウシュビッツのスライドやアンネの日記などを通して、ユダヤ人迫害の実態と、そこに置かれた人々の心情的な部分に迫るというものであった。開始前は多少ざわついていた生徒たちも次第に発表の内容に引き込まれていき、水を打ったように静かに聞いていた。



発表後、映画「ライフ　イズ　ビューティフル」を視聴し、終わりの挨拶を聞いた後、各学級に戻り原稿用紙に感想をまとめた。

体育館での取り組みとは別に図書部が中心となって二十五日、二十六日、二十九日の三日間数学教室で「アンネ・フランク展」を行った。京都の聖ロゴス社という教会からお貸りした約百枚のパネルを展示した。同時に平和の集いの取り組みに関連する図書も展示した。

取り組み終了後の二月八日には環境委員会が中心となって、「アンネのバラ教会」から贈られた「アンネのバラ」を生徒昇降口に植えた。「アンネのバラ」は四季咲きの美しいバラである。花が咲くたびに、今年度の平和の集いの取り組みを生徒たちが思い出してくれれば思う。

子どもの森

附属幼稚園　教諭　木村公美

附属幼稚園の自慢のひとつに、敷地の東側にある子どもの森があります。森は四季おりおりに子どもたちに豊かな表情を見せてくれ、遊び相手となり、子どもたちの成長を見守ってくれています。

～春～

森いっぱいに咲いた桜が、進級、入園してきた子どもたちを迎えてくれます。さっと風が吹き、花びらが舞い散ると、「ゆきみたい！」とはしゃいで追いかける子どもたち。足元にはタンポポやシロツメクサが揺れ、チョウチョや生まれたばかりの小さなバッタが飛び交います。

よもぎなどの小さな草花は格好のままごとの材料になり、子どもたちの手にかかると、おいしそうなごちそうやジュースに変身します。少し園生活に慣れてきた頃に、森のベンチにみんなで腰掛けておやつを食べていると、心地いい風が頬をなでていきます。

～夏～

初夏の森にはグミやユスラウメなどが実り、子どもたちと鳥たちとで取り合いっこになります。木から直接もいで食べる経験が少なくなっている現在ですが、おいしいものには目がないのは今も昔も同じ。年長児が年少児に「とったるわ」「洗って食べるねんで」と教える姿もほほえましく、年長児らしさが板についてくる頃です。

次第に深く濃い緑に彩られていく森。青々と茂った桜の葉っぱが、日に日にきつくなっていく日差しを遮り、涼しい遊び場所を作ってくれ、ほっとできる空間に。子どもたちが走ると、

少し大きくなった虫たちが、ピョンピョンと跳ねます。

～秋～

秋こそ、森が本領を発揮する季節。図鑑・虫かご・虫メガネを手に、大きくなったバッタやカマキリを探す真剣な眼差しの子どもたち。最初は恐る恐る触っていた子どもも、なかなかの虫取り名人に成長していきます。

また、秋が深まる頃にはどっさりふっかりとした落ち葉のじゅうたんが子どもたちを待ちうけています。落ち葉をたくさん集めて作ったふかふかのプール。落ち葉のかけあいっこや、うずまりっこ。そして小さな山は格好の滑り台に変身。ゴロゴロと転がり落ちる気持ちよさは森ならではでしょう。子どもたちの歓声が響きます。

～冬～

気温がぐっと下がってくる頃、寒い季節ならではの楽しみが、たき火と焼き芋。斎藤さんに教えてもらったり手伝ってもらいながら、みんなでたき火を囲みます。火が小さくなってくると、「この葉っぱがよく燃えるねんで」と、スギの落ち葉を集めて来る子どもたち。どの葉っぱがよく燃えるかを毎年の経験で知っているのです。みんなで食べる焼き芋もまた格別で、たくさんの笑みがこぼれます。

このように、幼稚園にとって森はかけがえのない環境となっています。でも、まだ私たち教職員の知らない森の姿もあるのでは？もっともっと森と仲良くできるにはどうしたらいいのかな？と日々研究を続けていきたいと思っています。